

交響曲第5番、第9番

ヴァイオリン協奏曲第1番

弦楽四重奏曲第8番、ヴィオラ・ソナタ

15曲の交響曲、15曲の弦楽四重奏曲

15に込めた彼の想い、揺るぎない信念の強さを感じる

●伊藤美由紀

《交響曲第5番》1937
 《交響曲第9番》1945
 《ヴァイオリン協奏曲第1番》1947—48
 《弦楽四重奏曲第8番》1960
 《ヴィオラ・ソナタ》1975

シヨスタコーヴィチは、波乱に満ちた生涯に15曲の交響曲、15曲の弦楽四重奏曲を書いている。複雑なソ連の政治的背景、戦時下の最中に15曲の並外れた数の作品を書き上げた。15に込めた彼の想い、揺るぎない信念の強さを感じる。体制への反抗心、戦争の影響で、彼の作品には、重々しい暗い影、大胆さ、皮肉めいたユーモアが漂い、彼の心の叫び、葛藤が込められている。無調的な音の扱いが部分的に

見られることもあるが基本的に調性音楽であり、バッハ、ベートーヴェン、マーラーの多大な影響を受けており、古典的様式を基礎とし対位法、作品の引用、ユニゾン、ヘテロフォニーなどの使用は、彼の特徴的な音楽語法である。異なった年代に書かれた作品から選曲した5作品を時代順に紹介していく。

交響曲伝統の継承者であり20世紀を代表する交響曲作曲家の一人として、シヨスタコーヴィチは、15曲の交響曲を生み出し、各作品には、作曲時期の複雑な政治背景、彼の信条が深く反映されている。当時、彼の作品が「形式において民族的、内容において社会主義的」という要請から外れており糾弾の対象となったことを受けて、大作である《交響曲第4番》の初演は延期され25年後となった。その後

すぐに「革命」と呼ばれることもある「生」をテーマとした《交響曲第5番》に取り掛かった。結果的には、10月革命20周年記念の演奏会で初演され大成功を収めた。芸術家にも国の圧力がかかり内面的格闘の上に生まれた作品でもある。全ての苦難に対する勝利を歌いあげたような最終楽章では、ファンファーレとともに希望が込められているような熱意が感じられる。また、第1、4楽章では、ビゼーのオペラ『カルメン』の有名な「ハバネラ」からの引用が見られる。

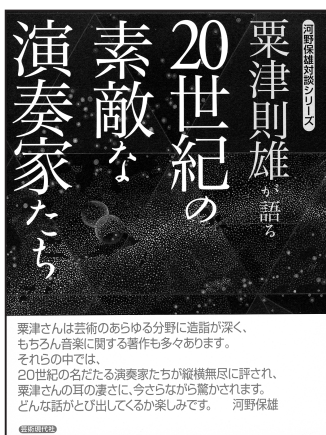
2曲目の交響曲は15曲からどの観点で選曲するのか少々迷うところであるが、大編成で長大な作品が多い中、彼の交響曲の中では短く簡潔で無駄がなくアイデアが凝縮されている《交響曲第9番》を選んでみる。ベートーヴェン以来「第9」は、作曲家にとって意識せざるを得ない番号であるが、彼は、その記念碑的な華やかさの期待をこの作品で裏切った。交響曲にしては短いが全5楽章の構成で、ハイドン風の古風なスタイルで軽快に纏められている。各楽章の様々な楽器の特徴的なソロの絡み合いは聴かせどころになっており、奏者も聴衆も楽しめる形式になっている。室内楽的な書法も楽器の組み合わせを配慮し音響も熟慮されている。例えば、2楽章のクラリネットの二重奏後の中間部で弱音器による弦楽器にホルンを加えたり、短い4楽章ではトロンボーン、チューバの葬送曲風な音形とファゴット独奏による悲痛な叫びのようなパッセージによる表現が見られたりする。

コンチェルトの分野では、ピアノ、ヴァイオリン、チェロのために各2曲ずつ書いている。とりわけ、第2時世界大戦中に友人でもあった20世紀を代表する名ヴァイオリニストのオイストラフの為に作曲された《ヴァイオリン協奏曲第1番》は、その壮大さを「シンフォニーの変容」と彼に言われている。バロック組曲風の4楽章からなり、各楽章はノクターン、スケルツォ、パッサカリア、ブルレスクの標題をもっている。1楽章は瞑想的なヴァイオリン独奏のテーマにより始まり、ソロは終始、緊張感のある張り詰めた無限旋律のような流れとなっており奏者の音楽性が際立つ。金管楽器はホルンとチューバのみの変則的な編成で、チェレスタとハープによる透明感のある伴奏、シロフォン、タンブリン、ティンパニの賑やかな行進曲、ホルン、チューバなどによりコラル風なパッサカリアなど、各楽章では個性的な音色を追求している。3楽章と4楽章の間の長大なカデンツァは、技巧的な重音奏法やヴィルトゥオーソ的なソリストの名技の見せ場でもある。

室内楽の分野でショスタコーヴィチは、特に弦楽四重奏曲を晩年にかけて力を入れて書き上げている。1作目を書いたのがちょうど交響曲第5番を書いた後で、他の分野で成功し実力を築いた所であった。《弦楽四重奏曲第8番》は、発表時に共産党当局の目を逸らすために「ファシズムと戦争の犠牲者」に捧げるとされているが、共産党に入党したことで精神的に追い詰められていた自分に捧げた作品でもあると言われている。全5楽章中斷

なく演奏され、全曲に渡って作曲者の名前の頭文字D—S—C—Hのドイツ音名からなる沈痛な暗闇を漂わせた主題（レ・ミ・ド・シ）が循環主題のように使われている。今までの自作からの断片も多々引用されており、個人的な体験の悲痛な嘆きを暗示している。

《ヴィオラ・ソナタ》は、死の直前に作曲された遺作となり、没後約2ヶ月後に初演された作品である。死を意識していたこともあり、思索的な深く重い深みのある響き、透明感のある張りつめたような緊張感のある全3楽章の作品となっており、ヴィオリストにとっても重要なレパートリーの1曲である。弦楽器の中で主役になる機会の少ないヴィオラを選んだことも、ヴィオラ特有の響きを想定しており、彼にとつて特別な意味を持つていたに違いない。1楽章冒頭は、ベルクの遺作であるヴァイオリン協奏曲の冒頭を髣髴させる。3楽章はベートーヴェンのオマージュとなっており、ピアノ・ソナタ14番「月光」を引用していることでも有名である。「月光ソナタ」の音形は、彼の《弦楽四重奏曲第11番》と《15番》でも引用されており、死の予感を切々と音で綴っているようである。彼の他の作品でも多用されている引用も、この作品では最後の作品ということを感じてか自作の15曲の交響曲を含めた引用を試み、自分の作品を振り返ることで最後のメッセージを込めたのであろうか。最後、ハ長調に達し、安らかに眠りにつくような時間の無限さを感じさせ曲を閉じる。



河野保雄対談シリーズ
栗津則雄が語る

20世紀の素敵な演奏家たち

栗津則雄・河野保雄 著

目次

レコードの楽しみ パブロ・カザルスのバッハ／無伴奏チェロ組曲
ブッシュ弦楽四重奏団 ジャック・ティボー ヨーゼフ・シグティ
「真正」の演奏とは カザルス・トリオと百万ドル・トリオ
音楽の恐さ 日本の文化とピアノについて
アルフレッド・コルトー グレン・グールド
エリザベート・シュワルツコップ マリア・カラス
ディートリッヒ・フィッシャー＝ディースカウ ハンス・ホッター
ヴィルヘルム・フルトヴェングラー ブルーノ・ワルター ほか

芸術現代社 刊

全書判 160頁 定価=2,200円（本体2,000円+税）